

タイトル	「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、どのように「活用」されるべきなのか？
著者	仲丸，英起； NAKAMARU, Hideki
引用	北海学園大学人文論集(67)： 40-45
発行日	2019-08-31

### 【各論 3-1】

## 「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」 は、どのように「活用」されるべきなのか？

仲 丸 英 起

英米文化学科の仲丸と申します。よろしくお願いたします。

私と鈴木先生および小柳先生で、本年の7月に長崎・天草地方を回ってまいりました。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、ちょうど我々が調査を行った2018年7月に認定されたばかりでしたので、現時点では日本国内で最新の世界遺産です。

私はイギリス史、鈴木先生は日本思想史、小柳先生はキリスト教思想をそれぞれ専門としています。このようにバックボーンの異なる3人が、「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」を観光に活用する際の問題点について考えたことを、私と鈴木先生が代表してお話したいと思います。

この遺産には、九州北部の西側に位置する12箇所の構成資産が含まれています。人々が潜伏していた場所なので、当然ですが離島が多く、本土に位置する場合でも半島の端の方です。そのような場所に隠れて、潜伏キリシタンは信仰を守り続けたということになっています。

先ほどから説明があるように、世界遺産に登録を申請するためには顕著な普遍的価値を証明しなければいけません。現地の調査報告に入る前に、まずは公式のホームページから抜粋してきたこれに関する文章を紹介することで、当該遺産が根本的に抱えていると思われる問題点を抽出してみたいと思います。

「顕著な普遍的価値の言明」の最初には、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、17世紀から19世紀の2世紀以上にわたる禁教政策の

下で密かにキリスト教を伝えた人々の歴史を物語る他に例を見ない証拠である。本資産は、日本の最西端に位置する辺境と離島の地において潜伏キリシタンがどのようにして既存の社会・宗教と共生しつつ信仰を継続していったのか、そして近代に入り禁教が解かれた後、彼らの宗教的伝統がどのように変容し終焉を迎えていったのかを示している。（下線部は報告者による、以下同じ）」と述べられています。後で鈴木先生からお話がありますが、実際は「終焉を迎えていった」というのは真実の一面しか表していません。キリスト教に仏教や神道が織り交ざった、その当時の宗教的伝統を守り続けている人々は今日も存在しています。この文章では、この点について一切触れられていません。

次に、「潜伏キリシタンは、信仰組織の単位で小さな集落を形成して信仰を維持し、そうした集落は海岸沿い、または禁教期に移住先となった離島に形成された。2世紀を越える世界的にも稀な長期にわたる禁教の中で、それぞれの集落では一見すると日本の在来宗教のように見える固有の信仰形態が育まれた。」とあります。これも後でお話しますが、長崎県は世界文化遺産登録を呼び水として、県を挙げて積極的に観光客を呼び込もうとしています。しかしここで述べられている通り、潜伏キリシタンは辺鄙な場所に隠れていました。したがって、当たり前ですが観光客にとってみれば訪問しにくく、観光資源として活用するにはそもそも矛盾も抱えている世界遺産だということになります。

そして「評価基準の適用」の項では、「本資産は、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが禁教期に密かに信仰を継続する中で育んだ独特の宗教的伝統を物語る証拠である。」「禁教期の潜伏キリシタンが自らの信仰を密かに継続する中で育んだ固有の信仰形態、大浦天主堂における「信徒発見」を契機とする新たな信仰の局面及び固有の信仰形態の変容・終焉が、12の構成資産によって表されている。」とされています。現地では、パンフレットで紹介したり漫画にしたりするなど、この大浦天主堂における信徒発見のストーリーをとにかく強調したいようです。この信徒発見というのは、鎖国の解かれた幕末に長崎にやってきたフランス人のプティジャン神父という

宣教師が、1865年に彼の教会を訪ねてきた浦上の人々について、彼らが250年あまりにわたって信仰を守り続けたカトリック信徒であることを発見した、という事実がもとになっています。一方で、これは各種メディアではほとんど触れられていないのですが、実はそのほぼ1年前に、彼らはイギリス国教会系統（聖公会）のアメリカ人宣教師のもとを訪れていたのです。ところが、聖公会はプロテスタントなので牧師は妻帯しているし、教会にはステンドグラスがないわけで、どうも我々が知っている信仰とこの人の信仰は異なるのではないか、と思って帰ってきてしまったのです。翌年にカトリックのフランス人宣教師のところへ行ってみると、こちらの方がどうやら我々が伝え聞いている信仰の形態に近いというので、神父に自分たちの信仰を打ち明けたようなのです。したがって、広くキリスト教の宣教師というくくりでいえば、彼らは前年にプロテスタントの宣教師に会っているのですが、それは公式の説明では一切無視され、カトリックの宣教師による信徒発見だけが事実として強調されているということになります。

整理すると、大きく分けて

1. 観光客誘致における難点
2. 住民感情と政治的思惑との乖離
3. 世界遺産としての価値の改変・ねつ造

という3つの問題点が指摘できるかと思います。3の内容について既に若干踏み込んでしまいましたが、詳しくは鈴木先生のほうからお話をさせていただくので、私はここまでで簡単に触れるだけにとどめておきます。以下では、1と2について我々が訪問して感じた点について、お話ししてみたいと思います。

まず、1の観光客誘致における難点についてです。さきほども述べた通り、この遺産の構成資産は離島がほとんどです。しかも、かなり遠距離に点在しています。そのため、例えば東京からでも大阪からでもよいのですが、初めに長崎市内へ行き、その後この構成資産全てをめぐるというのは、数日程度の普通の観光ではほぼ不可能です。最低でも2週間程度はかかっ

てしまうのではないかと思います。旅行会社のパッケージツアーなどを調べてみると、大体3日程度の旅程で、初日に長崎市内、大浦天主堂、浦上などを回って新地中華街で食事をし、次の日に五島列島の中で一番大きな島である福江島に渡って有名な教会を回り、そこから近距離にある久賀島や奈留島へ少し立ち寄って、その後ジェットフェリーで佐世保か長崎へ出て、飛行機で帰ってくるというコースがほとんどです。一方で、一番辺鄙な野崎島には実際に居住している人はおらず、管理を委託されている男性が1人で住んでいるだけですが、そこを回るというツアーは、ほとんど見つかりません。世界遺産登録を機に五島列島を売り出して観光に生かそうとしているのは分かるのですが、いかんせん物理的に周りにくいわけです。

我々は、長崎市外の調査地としてまず崎津教会に行きました。この崎津教会は、当該遺産の構成資産の中で、ただ一つ熊本県の上天草地方に位置しています。長崎市内から出発すると、天草に渡るまでに口之津という島原半島の南端まで行かなければいけないのですが、そこに到着するまでに約2時間かかりました。さらにフェリーに乗って、上天草半島の南端にある崎津に到達するまでにさらに約1時間を要したので、結局片道で3時間以上かかりました。崎津教会は、漁港の入江にある、非常にきれいな教会なのですが、もともと観光地ではなかったため、駐車場が整備されていません。少し離れたガイダンスセンターには広い駐車場があるのですが、教会付近には2・3台分の駐車スペースしかありませんでした。天草地方でも世界遺産で地域を売り出だそうという雰囲気は感じられましたが、本格的に観光客を誘致できるようなインフラが十分には整っていないようですし、そうかといって整備を進めると遺産の価値が損なわれてしまうような場所でした。

翌日以降は、五島列島の福江島、久賀島、中通島に向かいました。これらの離島には、長崎港や佐世保港からジェットフェリーが運航されています。ただし料金がかなり高額で、片道大人1名5,000円以上の運賃がかかります。しかもそれだけ料金を徴収しても赤字のようで、我々の訪問後、運航会社の一つであった株式会社五島産業汽船が経営破綻してしまいまし

た。現在は、五島産業汽船株式会社という新たに設立された別会社に事業は引き継がれていますが、いずれにしても運行会社の経営は厳しく、運賃は高額にならざるをえないということです。

久賀島や奈留島へ行くためには、福江島からさらにフェリーに乗船する必要があります。そして、この航路は1日に1・2便程度しか運航されていません。しかもその船が小型で、例えば久賀島に行くフェリーは、駐車スペースが3台分しかありませんでした。久賀島では旧五輪教会堂という教会を見に行っただけですが、ここに到達するには港からあまり整備のされていない道路をかなり長い距離走ってようやくたどり着ける駐車場から、さらに徒歩で階段を15分ほど下る必要があります。地元の人は船で来るのが一般的とのことでしたが、一般の観光客にとっては非常に不便な場所でした。

他方で、中通島の上五島地区では自治体が世界遺産の活用に積極的なようでした。島の東北端に頭ヶ島天主堂という教会があります。遺産保護のため、この教会へのマイカーの直接乗り入れは禁止されており、そのすぐ側の高台にあって現在は飛行機の運航が休止されている上五島空港の駐車場で車を降り、そこから無料のシャトルバスで海岸近くの教会へ向かうルートが整備されています。このように上五島ではガイドとバスの運転手がきちんと配置されていましたが、五島列島の教会群は総じて個人では非常に行きにくい場所にあり、なおかつ多数の観光客を迎え入れるための施策が十分には練られていないようでした。

次に、2の住民感情と政治的思惑との乖離に移ります。ほとんどの教会は、現在でも信徒の方が日常的に使用して管理している施設です。我々が訪れた時も、「これから司祭様がいらっしゃるのです」とおっしゃる地元の方が教会の外で待機されていたこともありますし、儀式等が行われていて教会内に入れなかったこともありました。教会というのは当然祈りの場所なので、我々のような部外者が入ってくることによって、地元の人たちの信仰の場としての静粛性や厳粛性が維持できなくなったり、さらには教会の建物の損傷が進行したりしてしまったり、遺産としての価値を下げしま

う危険性が出てくるのではないかと考えられます。

また、この世界遺産登録の旗を振っていたのは、もちろん政治家でした。「潜伏キリシタン関連遺産を確実に将来に引き継いで行くという大きな使命に身の引き締まる思いであり、これからも国や関係区市町等と連携して構成資産の保全とともに、構成資産の多くが点在し、人口流出や高齢化が進む離島・半島地域を初めとした地域の活性化に取り組み、住む人に誇りを、訪れる人に感動を与えられるような世界遺産を目指してまいります。」というのがHPに掲載されている長崎県知事のコメントです。構成資産の保全・観光客誘致・地域の活性化はいずれも重要な課題ですが、それら政策を具体的にどのように実行してゆくのかについては、触れられていません。このような状態を、現地の人が不安に思っているという記事が、2018年7月2日付けの朝日新聞熊本版に出ていました。この中で、現地の人は「観光客にはたくさん来てもらいたいと期待しています」と述べる一方で、「あまりに人が多くなって、地域で苦情が出ないかと気がかりでもあります。」という当然の懸念を示しています。このように、おそらくは政治主導で世界遺産登録が進んだために、その観光への活用方法について地元の意向を十分に踏まえられていないのではないかという気がしています。

最後の世界遺産としての価値の改変・ねつ造については、鈴木先生にバトンタッチをしたいと思います。